

# 小論文

広島大学 総合科学部 総合科学科（文科系）前期日程 1/2

## ＜総括＞

試験時間 150分 総解答字数 1200字

- ・昨年に続いて、「相対化」がキー概念の一つであった。内容的には、「時間」をめぐる議論である。
- ・若干読みづらく感じる資料はあったかもしれないが、いずれの資料も受験生にとってなじみ深い主題であった。また、2つの資料間で「近代的時間／前近代的時間」、「西洋的時間／東洋的時間」、「客観的時間／主観的時間」といった対を作りやすかったため、もう1つの資料を選べば「3つの資料を活用する」という条件を満たしやすかった。
- ・今年度は珍しく、資料のどれを選択して組み合わせても議論が成立する資料群であった。その意味で、この資料を選ぶと受験生の知見では議論が行き詰まる、この資料を選んだ場合は特定の資料を選択すべきであったといった制約はなかった。
- ・とはいっても、いずれの課題文も本格的な評論文であるため、論点を正確に読み取る作業と、複数資料をつなげる作業を両立させるためには、一定の練習が必要であった。
- ・多様な問題関心に即して書かれた資料を組み合わせて問題を発見し、身近な課題と関連づけつつ、論ずるに値する一貫した主題を設定し、論文を作成する力が求められているという点は、全く例年通りである。この出題方針は、現在進みつつある教育改革の要求に沿っている。大学で研究し、あるいは社会に出て取り組む現実の課題は難しく複雑だ。難しいことの難しさに翻弄されることなく、それを自らの力で探究できるまでに解きほぐす力が、今まで通り求められる試験であった。
- ・設問上でキーワードが与えられないタイプの出題であったが、共通するキーワードは拾いやすかった。

## ＜課題文の分析＞

大問番号	一
内 容 (主題)	時間論
出 典 (作者)	<p>【資料一】青木信仰『時と暦』東京大学出版会、1982年(2,576字) 【資料二】橋本毅彦・栗山茂久『遅刻の誕生—近代日本における時間意識の形成』三元社、2001年(2,968字) 【資料三】福岡伸一『動的平衡』木楽舎、2009年(2,744字) 【資料四】小川直之『日本の歳時伝承』角川文庫、2018年(1,904字) 【資料五】村上靖彦『交わらないリズム—出会いとそれ違いの現象学』青土社、2021年(1,7360字)</p>
長短・ 難易等 前年比較	資料総字数 約11,928字 長短 (短い・やや短い・ <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">変化なし</span> ・やや長い・長い) 難易 ( <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">易化</span> ・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

## ＜大問分析＞

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント (設問内容・論述ポイントなど)
一	課題文	学部系統的	一	論述	1,200字	5つの資料から3つ以上を選択し、その内容を踏まえて小論文を作成し、適切な題をつける。

※出題形式は「テーマ・課題文（英文を含む場合は付記する）・図表・その他」

※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」

※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

## <答案作成上のポイント・学習対策等>

2/2

- ・複雑で多様な問題から課題を取り出し、分析・推論を行いながら一貫した論文を作成するという出題であった。昨年度よりも取り組みやすかったが、資料間の対を作りやすいだけに、3つ目の資料選択を組み合わせる際に、工夫を要した。
- ・様々なテーマについての意見を、あらかじめ固定的に準備しておくことは、有効な対策ではない。複数資料を関連づけて主題を設定し、意見を述べる練習を繰り返してほしい。
- ・解答例は正解ではない。各解答例は、テーマ、難度にかかわらず通用する思考法の典型4つである。どのような思考法をとれば安定して答案を作成できるのかという点を、指導者の下で習得すべきだ。